

報告行動の生起を阻害する要因についての応用行動分析学的検討

— 自閉症児とコロナ感染とヒヤリハットの研究から —

雨貝 太郎

An Applied Behaviour Analysis Study of Factors that Disrupt the Generation of Reporting Behaviour.

-From a study of autistic children, Covid-19 infections and near-miss incidents

Taro AMAGAI

要約

我々の生活において、報告することは非常に重要視されているが、実際は十分な報告がなされておらずに、様々なトラブルが発生している。近年では、コロナウイルスの症状が出たにもかかわらず、隠したために感染拡大につながった事例や、保育の世界におけるヒヤリハットが報告されなかったことで共有されずに同じ事故を繰り返した事例などが見受けられる。本研究では、自閉症児に対して報告言語行動を指導する際に用いられている応用行動分析学の枠組みを使用して、コロナ症状の報告とヒヤリハットの報告が生起しにくくなっている阻害要因について検討した。その結果、簡単に報告しにくい様式の問題や、報告をした際に不適切な対応をされ、十分な保障がなされないことが課題として示された。

Abstract

Reporting is considered very important in our lives, but in reality, various problems have occurred due to insufficient reporting. In recent years, we have seen cases of the spread of infection due to concealment of covid-19 symptoms despite their occurrence, as well as cases where the same accidents were repeated due to non-reporting of near-misses in the world of childcare, which were not shared and thus not reported. In this study, the applied behavior analysis framework used to teach tact as reporting to autistic children was used to examine the disincentives that make it difficult to report covid-19 symptoms and near-misses to occur. The results indicated that issues such as the format making it difficult to report easily, and inappropriate responses and lack of sufficient safeguards when reports are made, were identified as challenges.

キーワード

応用行動分析学 報告言語行動 自閉症スペクトラム コロナ感染 ヒヤリハット

Applied behavior analysis, Tact as reporting Autistic spectrum disorder, Covid-19 infections, near-miss incidents

1. 問題と目的

日常生活の多くの場面において、我々は他者に対して「報告」という行動を頻繁に行っている。社会人にとって必要な3つの行動として「報告・連絡・相談」のホウ

レンソウが挙げられているように、生活する中で他者に正しい情報を伝えることは社会的に求められている。これは同時に、多くの人が十分に報告することができていないことの裏返しでもあると言える。

2020年以降、コロナウイルスが蔓延し、感染拡大する中で多くの問題が見えてきた。その中に、感染した可能性があるにもかかわらず、病院にも行かず、他者にかかわり、拡大を促進する遠因になった問題もあった。ここでは、他者に正しい情報を伝えるという報告が十分になされなかったことが指摘できる。

また、近年、保育の世界ではヒヤリハットという言葉が用いられることが増えてきている。ヒヤリハットはハイネリッヒの法則から生じた言葉で、近年ではハイネリッヒの法則のことを「ヒヤリハットの法則」と呼ぶことも増えてきている。元々は、労災事故の分析を行ったハイネリッヒが、1件の重大に事故の背景には、29件の軽微な事故と、事故には至らなかった300件の未遂案件があるとしたことによる。英語では「ニアミス (near-miss)」と表記され、日本では「ヒヤリとした案件」や「ハットとした案件」という意味で、「ヒヤリハット」と呼ばれるようになった。日本では労災問題よりも、交通事故や医療事故の防止に関する研究や実践が広く行われていたが（例えば、大久保・鈴木・西本・米谷・岸,2022）、この十数年、保育の世界でもヒヤリハットに関する事案の収集や対策方法の検討は積極的に行われるようになってきている（例えば、田中・中本・松永・宮下・能條,2021）。しかし、現場レベルでは、ヒヤリハット案件について主任保育者や園長に対して適切かつ十分な報告がなされていないことも多く、ヒヤリハットの阻止や改善に十分な対応が取られていない現状が指摘できる。

応用行動分析学の領域では、様々な言語行動の定義がなされ、主に自閉症児の言語の促進において有効性が示されている（例えば、藤原,1985）。報告する行動においても、様々な分析や支援がなされていて、報告を促す要素についての研究が多くされている（例えば、山本,1997）。

本研究では、自閉症児への報告の言語指導を行う際に用いられる応用行動分析学の枠組みを参照に、コロナの感染報告やヒヤリハットの報告について分析をし、なぜ報告行動が生起しないのかについて検討を行う。その上で、適切な報告行動が生起しやすくなるために、どのような改善点があるのかについて検討していきたい。

2. 応用行動分析学と言語行動

応用行動分析学においては、「行動 (B:Behavior)」の前に起こった事象を「先行事象 (A:Antecedent)」、行動の後に起こった結果のことを「結果事象 (C:Consequence)」とし、それらについて推測することで、行動が生起した機能を分析する学問である。それぞれの頭文字を取って、応用行動分析学における分析方法はABC分析とも呼ばれている。「お菓子を食べる」という行動が起こった際を例にとると、「先行事象」は「お腹がすいていた」「目の前にお菓子があった」といったことが、「結果事象」は「お腹がいっぱいになり幸せな気持ちで満たされる」「先行事象」は、さらに直接的なきっかけである「弁別刺激

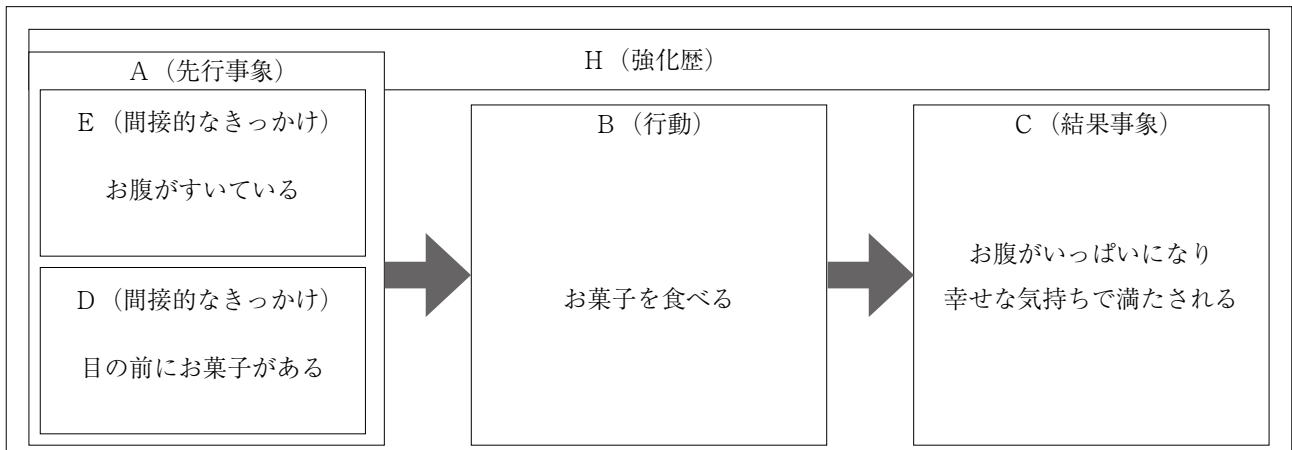


Fig.1 「お菓子を食べる」行動のABCDEH分析の例

(D:Discriminative Stimulus)」と、間接的なきっかけである「確立操作 (E:Establishing operations)」に分けることができ、前述の事例の場合、「弁別刺激」は「目の前にお菓子があった」になり、「確立操作」は「お腹がすいていた」となる。園山 (2003) は、これらに加えて、その時点までどのような強化を受け続けてきたかという歴史である、「強化歴 (H:History)」についても検討するABCDEH分析を提唱している。「お菓子を食べる」という行動のABCDEH分析の例をFig.1に示す。

応用行動分析学の創始者であるスキナーは、言語も行動の1つであるという考えから、「言語行動 (verbal behavior)」という表現を用いた (Skinner,1957)。言語行動は、その機能ごとに名前が付けられ、要求言語行動 (mand:マンド)、叙述言語行動/報告言語行動 (tact:タクト)、内言語 (intraverbal:イントラバーバル) など8つに分類された。例えば、「母親に絵本を読んでほしい子どもが、読むようにお願いした」という事例の場合、「絵本を読んでほしい」という先行事象、「『ママ、絵本読んで』」という行動、「絵本を読んでもらえて、楽しい気持ちになる」という結果事象のように分析でき、機能はマンドであると評価される。また、「空を見上げた子どもが、飛行機が飛んでいることを父親に告げる」という事例の場合、「飛行機が飛んでいる」という先行事象、「『パパ、飛行機だよ』」という行動、「『ほんとだ、よく気付いたねえ』」と言われるという結果事象のように分析でき、機能はタクトであると評価される。

本研究の対象となる報告について、言語行動の中ではタクトが該当する。しかし、2000年頃から、日本と欧米ではタクトに関する位置づけに違いができてきたので注意を払う必要がある。2000年以前、日本において、タクトは「叙述言語行動」と訳されることが多く、主に命名する行動のことを指していた。タクトはその段階に応じて、「命名 (naming)」と「報告 (report)」と2つに分けることができる。命名は、目の前にある事実を述べることであり、報告は目の前には存在しない、過去の事実について述べることである。伏見 (1997) はさらに、単語で叙述するものを純粋な「命名」とし、

文章で述べることを「記述 (description)」と分類した。2000年以降、タクトは報告言語行動と訳されることが増えてきている。そして、2010年頃から、命名行動は命名行動として独立し、報告行動がタクトとして取り扱われる研究がなされるようになってきた (例えば、河南,2017)。一方で、欧米においては、tactはnamingのことであり、reportのことを示すことはほとんどなく、報告する行動については、tactではなくreportもしくはreportingと特別に表記される研究がほとんどである。これらの背景を踏まえた上で、本研究においては、主に2000年以降、日本において報告言語行動として用いられているタクトについての枠組みを参照することとする。

3. 自閉症

自閉症児に対する応用行動分析的なアプローチは、1960年代から行われるようになっていった。当初は、まず粗大運動の動作模倣を行い、正しく模倣できたら強化を行い、次に微細運動の動作模倣を行い、といったように段階を設定し、1対1で指導をするディスクリート型指導で、発声や会話の指導を行っていた。1970年代から80年代にかけて、指導した発声や会話を非訓練場面でも用いる (般化) ができるような指導計画を立てることの重要性が指摘されるようになり、日常場面で指導を行う機会利用型指導法 (出口・山本,1985) が行われるようになってきた。80年代から90年代にかけて、マンドの習得や般化に関する研究が多くなされるようになってきた (例えば、藤原,1985、藤金,1991)。マンドの研究が多くなってきたことは、マンドが他の言語行動に比べて強化価が高く、習得をしやすいうことが影響していると思われる。

タクトに関する研究がなされるようになってきたのは90年代以降である。勿田・山本 (1991) が感情語の表出という内的事象を述べる指導を行ったことから自閉症児における報告や伝達に関する研究がなされるようになり、山本 (1997) は、報告行動を習得させる枠組みと、般化に至る流れについて構築した。2000年代に入ると、報告行動の研究は、先行事象や結果事象よ

りも行動自体に向くようになり、カードと言語での報告（大木・北福・渡部, 2004）や、携帯電話のメールを用いた報告（丹生・月ヶ瀬・望月, 2008）など、直接向かい合って音声言語を用いる以外の手段で、事実を伝達する研究がされるようになった。10年代に入ると、先行事象（例えば、雨貝, 2014）や結果事象（例えば、河南, 2014）に着目がされるようになっていった。

これらの研究を通して、分かっていることとして、確立操作は「話したい話題がある」、弁別刺激は「話したい人がある」という先行事象において、報告行動は

生起する。この際、報告する手段が、その人にとって簡単にできることが必要である。そして、報告をした際に結果事象として社会性強化子が提示されることが必要となる。社会性強化子とは、報告行動の文脈で言うと、「分かったよ」「教えてくれてありがとう」のような反応が返ってくることである。先に述べた「空を見上げた子どもが、飛行機が飛んでいることを父親に告げる」という事例について、好ましい強化子が与えられる場合について、ABCDEH分析を行うこととしよう。Fig.2に分析の結果を示した。

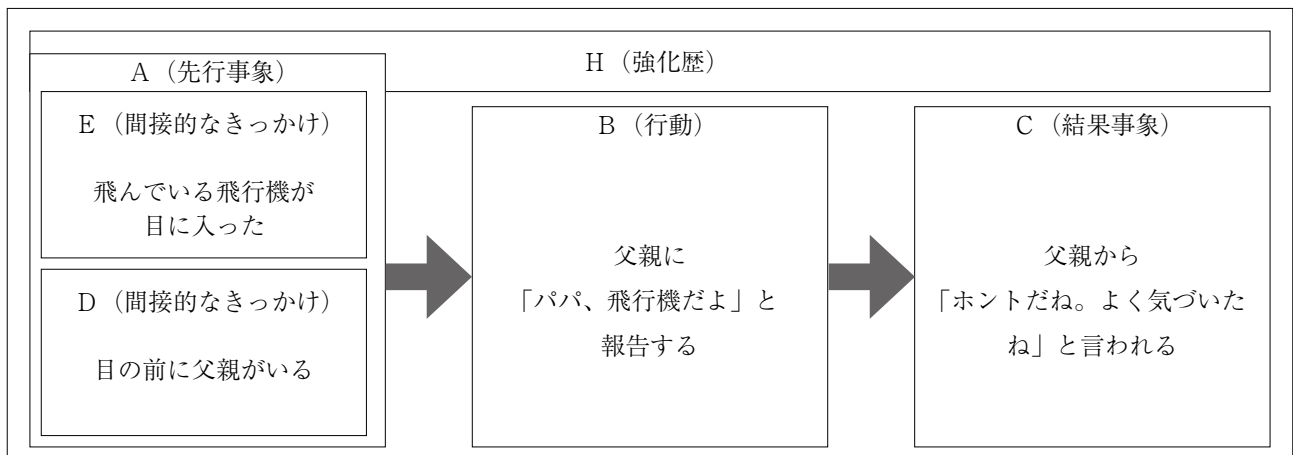


Fig.2 「父親に飛行機が見えたことを報告する」行動のABCDEH分析の例

このように、好ましい先行事象と結果事象が存在することと、簡単にできる手段があることで、報告行動は生起しやすくなることが分かっている。これらの点を踏まえて、コロナ感染の報告行動とヒヤリハットの報告行動が生起しにくい要因について分析していく。

4. コロナ

2020年1月以降、新型コロナウイルスが世界的に猛威を振るい、3月頃から日本人の生活は制限的なものとなって行った。有名な芸能人が相次いで亡くなったことから、不安は掻き立てられ、感染しないように「三密を避ける」という言葉を筆頭に、他者と極力かわらない生活を送ることを余儀なくされた。誰もが同調圧力でマスクを着用し、感染対策をしていったが、感染者は日に日に増加を繰り返して行った。この頃、問題になって行ったのが、重症患者ではなく、感染した

ものの一切症状の自覚がない無症状者と呼ばれる人たちがであった。無症状者たちは、感染し常にウイルスを巻き散らしているものの、自覚症状がないために、検査をすることがないため、誰も気づくことができない。その結果、感染は広まっていったと言われている。一方で、自覚症状はあるものの、陽性とみなされることを嫌がり、PCR検査や抗原検査を受けないまま、ウイルスをまき散らし続け、感染拡大に寄与していた人も多く存在した。本来、コミュニティの成員として生きるにあたり、周囲に対し有害なウイルスを巻き散らさないように配慮することは多くの人が理解して、実践していることである。しかし、これだけそのウイルスの感染力についての報道がされているにもかかわらず、感染拡大につながる選択をしていた人が多く存在したことには、社会構造上の問題が何かしらあると思われる。

前述の応用行動分析的な枠組みで、「コロナの可能性が高い症状が出たことを報告する」行動について分析

してみることにしよう。Fig.3に分析の結果及び好ましい結果事象を示した。

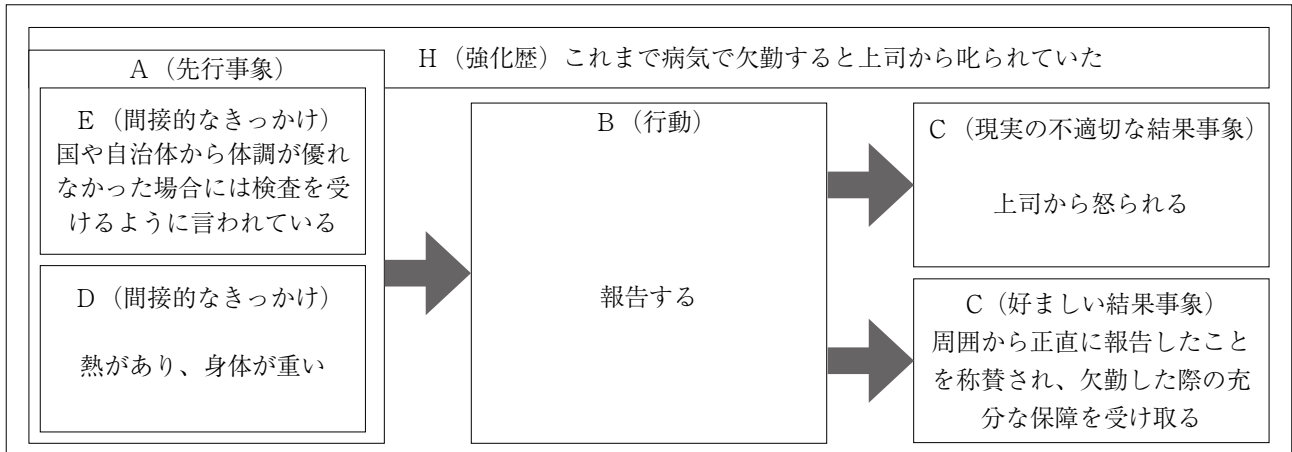


Fig.3 「コロナ症状が出たことを報告する」行動のABCDEH分析の例

先行事象のうち、確立操作には「症状が出た場合は、検査を受けるように国から言われている」、弁別刺激には「熱があって、身体が重い」が当てはまるだろう。そして、結果事象には、「仕事や学校を休む」といった分析ができるだろう。「仕事や学校を休む」という結果事象は、体調不良の状況を改善するという観点では、必要な対応である。数日間休むことで治癒し、健康な状態に戻ることができる。学校に通う多くの子ども達は、堂々とサボることができて喜んでいて。一方で、仕事をしている会社員の場合、状況が異なっていく。「仕事を休む」の先に待っている内容としては、まず「上司からの叱責」が考えられる。インフルエンザ流行期においても、日本では頻繁に見られていたが、罹患した場合、有給休暇を消費するか、欠勤するかを選ぶことになるケースが多く見られる。また、いずれの場合も、休んだ場合に「それくらいで休むな」という叱責をする上司が一定の会社に存在する。また、日雇い労働者や、パート・アルバイトの場合、1日欠勤することが直接その月の収入に大きな影響を与えている。そのため、症状があったとしても無理をして働こうとする傾向がある。症状が出るまでの生活の中で、「病気で休むと上司に叱られた」や「病気で休んだために、無給の状態が続いた」といった強化歴が形成されていく。つまり、適切な強化がなされていないために、コロナに

感染したことを正直に報告するという行動が生起しにくくなっているのである。

本来、感染拡大を防止する観点から考えれば、結果事象には「仕事や学校を休む」の他にも、「周囲から感謝・称賛される」や「国や地方自治体から十分な生活保障をされる」という内容がなくてはいけない。このような結果事象があって初めて報告行動は強化されていく。2020年頃のウイルスの正体や適切な対策が明らかではなかった時期には、恐怖心から多くの人が徹底した対応を取り、国や自治体もホテルや自宅に隔離させた際に、食料提供などを行っていたため、報告は生起していたことが想定される。しかし、「ウイルスが弱毒化してきた」という報道がされ始め、隔離された際の十分な保障がされていないことが伝わってくると、適切な報告行動は起こりにくくなっていった。

したがって、コロナウイルスの感染拡大につながったであろう、症状に関する報告行動の生起を阻害する要因としては、報告した際に叱責を聞き手から叱責を受けるなど、好ましくない対応をされたことや、仕事を休んだ際の十分な保障が長期にわたってされなかったという、適切な強化子が与えられなかったことが影響していると考えられた。

5. 保育所におけるヒヤリハット

保育場面におけるヒヤリハットについては、様々な研究がなされている。飯野・田畑（2021）は、幼稚園児の様子を観察とアンケートによる調査で収集し、年齢別のヒヤリハットの起こる要因について分析し、年少児には一人でいる時に起こりやすく、学年が上がるにつれて友達とのかかわりで起こりやすくなる点や、行動範囲が広がるために起こりやすくなる点などの傾向を示した。山本（2014）は保育士における事故について50か所の認可保育所の事故の分析を行い、転倒、走る、衝突といった事態で怪我が起こりやすいことや、歯や口の部分に怪我をしやすい傾向があることを示した。

こども自身の未熟さゆえに起こる事故もあるものの、保育者側の原因で起こる事故も多くある。野田・荻原（2020）は、幼稚園に提出されたヒヤリハットの報告書を分析し、保育者側の要因として、「失念」と「違反」があわせて48%に至ったことに着目した。保育者には、毎日の繰り返しの保育の中で、慣れによる注意散漫が生じて「うっかり」することや、「焦りや慣れによる手順の省略や手抜き」をすることがあると指摘している。このような姿勢は保育者としては、一般的に好ましくないものとして評価される。しかし、山本（2018）が述べているように、人間はミスをする生き物であるが、事故やヒヤリハット事例を収集し、危機認知および注意力の欠如が起きやすい状況を検証することで、何が起こったのかをイメージすることで、誰かがミスをしても他の誰かが発見・警告して回復できる機会を確保する材料になりうる。ヒヤリハットが二度と起こらないようにする意識は大切であるが、人間と人間とのかわりである以上、保育の世界において完全にヒヤリハットを排除することは現実的に不可能である。しかし、本人と周囲の配慮や、環境整備を通して可能な限りゼロに近付ける意識が重要となってくる。

葛野（2019）はヒヤリハットを記録としてまとめることによって、事故やヒヤリハットにかかわった保育者が改めて自分の保育について見直す機会になること、そして、他の保育士はその状況を理解することで、自

分の保育を展開する時に、その中に潜む危険性の可能性に気づき、保育中の事故防止に役立つ可能性があることを指摘している。また、松田（2019）は、ヒヤリハットを文章化して教育課程や保育計画などに反映することによって組織的な対応をとれるようになる可能性があり、そのような対応を取っている施設は地域との連携にも積極的であることを示唆している。これらの指摘の通り、ヒヤリハットをきちんと文章としてまとめて共有することで、減少させることは可能なだろう。しかし、実際のところ、ヒヤリハットは保育の世界で今でも頻繁に起こり続けている。

ヒヤリハットの報告に関する問題点として、まず情報共有がされにくい点が挙げられる。山本（2014）は、再発防止の目的で作成された報告書が保育所内でしか共有されないことや、全国で報告書の様式が統一されていないことを問題点として指摘している。必死にヒヤリハット対策を行おうとしていることは間違っていないが、市町村や幼稚園、保育園が個別に動いているために、結果として様々な事例に触れにくい環境となっている。また、アンケート調査を行った松田（2020）は、ヒヤリハットを行う上で、ゆとりのある保育の実施が重要であることを指摘しているが、同時に、現在の保育現場では、保育者たちは職員全体で連携をし、自分たちでヒヤリハット防止をしようと責任感を持っているものの、保育者不足という課題があり、地域の人や保護者には頼らずに、保育者だけの責任で対応しようとする傾向があることを示している。幼稚園や保育園が自分たちだけで解決しなければいけないという意識が、結果として情報の共有を阻害している可能性がある。

また、ヒヤリハットの報告自体を阻害する要因があることも挙げられる。葛野・加藤（2020）は、多くの保育現場においては、事故発生後に保育士が自分の保育を振り返り、改めて気付いたことを記載し提出することがほとんどであり、若い保育士の中には「ヒヤリハット」を記入すること自体を重荷に感じ、他の保育士が記入した「ヒヤリハット」を他山の石として共有することが難しくなっている点を指摘している。さら

に、佐合（2023）は、ヒヤリハットを報告したとしても、改善策の提示に相当するフィードバックがなければ、報告者が、報告する意図や必要性に対して疑問がわき、報告件数の減少に直結することを問題としている。ヒヤリハットの報告をすること自体も負担と感じて、なかなか報告をしようと思わない。さらに、頑張っ

て報告をしても、そのことに対して適切なフィードバックが与えられない。そのような背景から報告が起りにくいことが考えられる。

これらの背景を踏まえて、応用行動分析的な枠組みで、「発生したヒヤリハットを報告する」行動について、同様に分析してみることにしよう。Fig.4に分析の結果及び好ましい結果事象を示した。

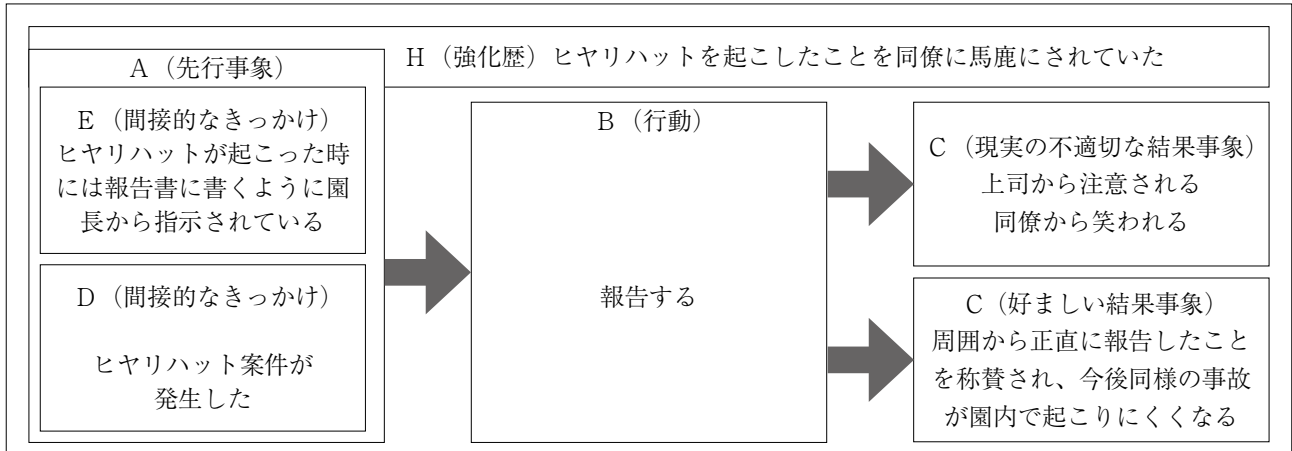


Fig.4 「ヒヤリハット案件が起こったことを報告する」行動のABCDEH分析の例

ヒヤリハットの問題においては、先行刺激については大きな問題は見当たらない。現実に事件や事故は起っていて、それについて報告するように多くの園で指示がなされている。しかし、実際には報告行動が生起していない。まず、行動面の問題としては、記録を書くこと自体の負担が高すぎることが考えられるだろう。保育者の仕事は、日案、週案等の指導案や、保護者に対する連絡帳、壁面飾りの作成、場合によっては実習生の記録の添削も加わり、実際にペンをもって紙に書く作業が多すぎる。これらを書いた上で、ヒヤリハットの報告書も書くように指示されても、負担感が強く、書く気力が起らなくなるのは自然なことだろう。また、結果事象の問題としては、ヒヤリハットの報告に対して適切な強化子が与えられないことが大きく影響しているだろう。ヒヤリハットでは、こどもの転倒や衝突など、なんらかの傷害事案になることが多い。そのため、ヒヤリハットについて報告をすると、不適切な保育をしたことを咎められて、主任保育者や園長から注意や叱責を受けることが多い。または、直

接的ではなくても、他の保育者から後ろ指をさされるような気持ちになりやすく、報告をすると自分にとって悪いことが起こるために、報告しないままにしたり、隠ぺいをしようとしたりする可能性がある。

これらの問題点を改善する方法として、まず行動面の課題については、保育以外の分野、特に交通事故や医療事故のヒヤリハットについての研究がよい参考となるだろう。赤木・大北・那住・菅沢・毛利（2019）は、交通ヒヤリハットのデータベースを最適化しようとしている。他の分野では、紙媒体ではなく既にパソコンなどの機器を用いて情報収集を行い、それらが適切に用いられるように日々、システムが改良され続けている。紙媒体での情報共有を続けている保育業界において、ヒヤリハットをデータ化することで、日本中の保育者が参照できる体制が整えば、ヒヤリハットを減らすことに大きく貢献する可能性があるだろう。

結果事象の課題についても同様のことが考えられる。飛行機の操縦士が経験したヒヤリハット報告文章について分析を行った大澤・高木・中西（2021）は、ヒヤリハッ

トが起こったものの、どうにかして事故につながらずに解決することができた事案を「Good job」と表現し、これまでは、失敗事例としてとらえられてきたヒヤリハットも詳細に分析をすると、良い振る舞いの存在が見出せることを指摘している。佐合（2023）は報告する側も報告を受ける側も、ヒヤリハット活動の正しい理解と安全推進に対するポジティブな意識の醸成が、今後のヒヤリハット活動のさらなる活性化と安全管理の充実に求められると提起している。

ヒヤリハットとして挙げられる事例のほとんどは、そこにかかわる全ての人間が一切、気を抜くことなく集中を続けていて、環境面の問題がなければ、事故として起こらずに済んだものばかりである。そのため、「ヒヤリハットを起こしてしまったこと」自体が悪いことであり、そのことについて報告をすることにはためらいや、罪悪感が生まれやすい状況となっている。しかし、前述したように、人間が常に集中をし続けることは不可能であり、どこかで必ずミスが起こり、ヒヤリハットが起こる。同じヒヤリハットを起こさないように、保育者が意識をすることと、他の保育者が過去に経験したヒヤリハットを自分が起こさないように意識することが求められている。そのために、重要になってくるのは、報告すること自体が楽にできるように負担を減らすこと。そして、何より、「ヒヤリハットを起こしたと報告したこと」が素晴らしい行動であると、周囲が称賛することだろう。もちろん、同様のヒヤリハットを起こし続けたのであれば、先輩保育者が指導をすることや、園全体として環境面の整備をする必要が出てくるだろう。しかし、園内で初めて起こったヒヤリハット事例について報告してきた保育者に対しては「あなたが報告してくれたから、今後、同様の事故が起こらずに済むかもしれない。報告してくれてありがとう」と褒められる雰囲気こそが、ヒヤリハットの減少のために有効であると思われる。

6. 総合考察

本研究では、自閉症児者の指導に用いられている応用行動分析学の観点から、コロナとヒヤリハットの問

題について検討を行った。

コロナの問題に関しては、ワクチンの効果など医療的な効果の検証は多くされているが、感染を拡大させた社会的な要因や心理的な要因に関する研究はまだ十分にされていない。特に、感染をしている可能性の高い人がどのような理由で医療的ケアを受けなくて、そのままの生活を行って、周囲にウイルスをまき続けたのか、また、実際に陽性の診断を受けた人がその事実を他者に伝えないまま、かかわり、感染を拡大させていたのかについては、明確な検証はされていない。そのため、本研究でも、起こっていたであろう事象について想定した上で分析を行っているので、当事者たちが考えていたこととは違っていった可能性がある。しかし、大枠としては外れてはいない想定であったと考えている。今後の課題としては、当事者たちに実際の理由を聞き取るなどして、情報を収集することで、今後新しく生まれる感染症の感染拡大防止に貢献できるのではないかとと思われる。

ヒヤリハットの問題に関しては、この10年程で多くの研究がなされるようになり、どのような背景でヒヤリハットが起こっているのかについては、ある程度判明してきている。しかし、その一方でヒヤリハットの数が著しく減少しているような傾向は見られていない。その理由として、行動面と結果事象面の課題を指摘した。小学校以降の教育課程においては、児童生徒にタブレットやノートパソコンを貸与または配布し、情報機器を用いた学習を行うことが増えたことに伴い、教師自身も学校内でパソコン等を使用する機会が増えた。特に、コロナウイルスの蔓延以降、オンラインやオンデマンドでの授業を実施するに伴い、学校内のパソコン機材も充実し始めている。一方で、保育業界においては、まだ「自分で書くこと」に対して、客観的な根拠もないままに、多くの園で様々な業務において求め続けている背景がある。自閉症児の研究においても、「言葉で話すこと」はできなくても、他の行動であれば表出できるようになった事例は多く見られる。これは、自閉症児に限らないことで、「書くこと」「話すこと」のように、明確な根拠もなく、特定の方法でのみを表

出することを求めていると、人間は十分に自分が思っていることや感じていることを伝えることができなくなる。保育業界においては、本研究で題材とした報告行動に限定せずに、なぜ「書くこと」が重要なのかを再検討し、「書かなくてもいいこと」については、パソコンやスマホで入力するなど、他の方法で表出してもいいことにすれば、ヒヤリハットはより多く収集できることだろう。

そして、全ての事例において、最も重要な要素は、報告行動に対する適切な強化子が提示されることである。小学生の娘が母親に「今日、さくらちゃんとトランプで遊んだの」と言うような報告に対しては、適切な強化子を与えることが多い。しかし、「熱がある」「こどもがケガをした」といった悪い内容の報告に対しては、多くの場面で聞き手はその報告行動を強化していない。「どうして、そんなことになったんだ?」といったように原因を究明しようとし、「でも、それは失敗したおまへのせいだ。」と報告者に責任を押し付け、場合によっては、「あいつはこんな失敗をしたんだぞ」と周囲に伝え、嘲笑することもある。最終的に、「あんな失敗をするやつには重要な仕事は任せられない」と冷遇することすらある。しかし、本来、ヒヤリハットを含め、失敗したことを報告してきた相手に、聞き手がすべき対応は「報告してくれてありがとう」と称賛することである。適切な強化子を提示した上で、その問題が起こった原因や、失敗した要因について検討を行うことこそが、真の意味で問題解決につながっていくのだ。

本研究ではコロナとヒヤリハットという2つの事柄から、報告行動の生起が阻害される要因について応用行動分析学の観点から検証した。葛野ら(2020)は、小さなことも話し合える風通しのいい職場では、多くの「ヒヤリハット」が出され、保育観の共有がなされると指摘しているとしているが、これは保育業界だけの話ではなく、我々の生活全般において同様に起こっている問題であろう。我々の行動は、これまでの強化歴(園山,2003)の影響を大きく受けている。報告した際に悪い結果が続いていれば、今後、報告は起こらなくなる。しかし、逆に言えば、報告した際に良い結果

が続くようになれば、新しい強化歴が作られ、安定して報告行動が生起するようになるはずである。良い内容の報告だけでなく、悪い内容の報告に対しても、適切な強化子を与えること、そして重要な話だけではなく、小さなことも聞く耳をもって強化をする姿勢が、報告行動を促進し、問題点が改善されやすくなり、我々の生活全般がより好ましいものになるのであろう。

引用文献

- 赤木康宏・大北由紀子・那住正樹・菅沢深・毛利宏(2019) 多様な利用法を受容するためのヒヤリハットデータベースの機能拡張に関する研究. 自動車技術会論文集,50,2,629-635.
- 雨貝太郎・園山繁樹(2014) 知的障害のある自閉症スペクトラム障害児における「不自然な状況」に関する報告言語行動の指導. 障害科学研究,38,185-197.
- 藤原義博(1985) 自閉症児の要求言語行動の形成に関する研究. 特殊教育学研究, 23 (3) 47-53.
- 伏見貴夫(1997) コミュニケーション行動の機能的分析. 小林重雄監修, 山本淳一・加藤哲文編著, 応用行動分析学入門. 学苑社, 40-60.
- 勿田文記・山本淳一(1991) 発達障害児における“内的事象”についての報告言語行動(タクト)の獲得と般化. 行動分析学研究, 6 (1), 23-40.
- 飯野由香利・田畑知美(2021) 年齢別にみた幼稚園児の心身の特徴とヒヤリハット発生件数との関係. 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 13 (2), 259-266.
- 河南佐和呼・野呂文行(2014) 自閉症スペクトラム障害児における3語文での報告指導と伝達機能の評価. 障害科学研究,38,163-174.
- 葛野真恵(2019) 保育所における乳児の保育事故を考えるヒヤリハットから. 千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報,55-64.
- 葛野真恵・加藤智子(2020) 「ヒヤリハット」から見える保育についての考察. 千葉敬愛短期大学紀要,42,25-33.
- 松田知明(2019) 幼児教育における事故防止と保育計画と

- の関係—ヒヤリハットのアンケートを用いて—. 羽陽学園短期大学紀要,11,19-22.
- 松田知明 (2020) 幼児教育における事故防止と保育計画との関係 (2) —保育におけるゆとりとヒヤリハットの防止についての—考察—. 羽陽学園短期大学紀要11,2,95-105.
- 野田多佳子・荻原ひろみ (2020) 幼稚園内で発生した微小事故「ヒヤリハット」について—事故防止をめざした組織的な対応の試み—. 教育実践学研究,25,191-200.
- 大久保智生・鈴木修斗・西本秀右・米谷雄介・岸俊行 (2022) 保護者における交通安全アプリのニーズと交通安全意識および交通行動の検討—ヒヤリハット登録アプリ開発推進のための調査から—. 香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告 27 19-29.
- 大澤歩夢・高木翼・中西美和 (2021) テキストマイニングを用いたヒヤリハット報告からのGood job抽出の試み—航空安全情報自発的報告制度 (VOICES) によるデータの分析—. ヒューマンファクターズ,25,2.
- 佐合智弘 (2023) 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター. 学校におけるヒヤリハット事例の収集と分析に関する基礎調査—都道府県・指令都市・中核市・特別区の取組に注目して—. 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要,3,139-152.
- Skinner, B.F. (1957) Verbal behavior. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 園山繁樹 (2003) 行動論と援助アプローチ. 小林重雄・園山繁樹・野口幸弘編著, 自閉性障害の理解と援助, コレール社, 94-101.
- 田中住幸・中本貴規・松永幸代・宮下幸子・能條歩夢 (2021) 屋外での保育における保育者の危険予知, 回避・コントロール—対策能力向上に向けた教材開発—. 飯田女子短期大学紀要 38 157-172.
- 山本広志 (2014) 保育所における事故の分析. 山形大学紀要 (教育科学) ,16,1,59-68.
- 山本淳一 (1997) 自閉症児における報告言語活動 (タクト) の機能化と般化に及ぼす条件. 特殊教育学研究, 35(1), 11-22.
- 山本建太郎 (2018) 救急業務に関連した事件事例及びヒヤリハット事例における心理的要因の分析. 日救急医会関東誌,39,3,405-408.